

在外研修報告

—ギリシア・ローマの古代都市遺跡—

1989年3月26日から二ヵ月間、文部省在外研究員として、ギリシア、イタリアに出張した。この在外研究は、ミノア期から帝政ローマ期にかけての、いわゆる古代都市遺跡の現地を踏査し、王宮・テンプル・フォルム・アゴラ・テアトル・住居など都市構成の段階差、立地、周辺の地形（生産基盤）との関連、遺跡規模などを調べるとともに、日本の宮都の発展段階と対比し、古代都市の構造とその発展の過程について考えることを目的としたものである。

ギリシアでは、都市の初現段階に位置づけられるミノア文明期のクレタ島やサントリーニ島のクノッソス・フェストス・マリア・アクロティリの諸遺跡、ミケーネ文明期のミケーネ、アルカイック・古典・ヘレニズム期のアテネ・コリント・オリンピア・デロス・デルフィイなどのポリス都市遺跡、帝政ローマ期のアテネなどの諸遺跡を見学し、イタリアでは、ローマ・ポンペイ・オステア・アムンツィアータなどの帝政ローマ期の遺跡と、それに先行するギリシア植民都市のバエストウム・セジェスタ・アグリジェント・セリヌテなどの遺跡を訪ねた。

これらの遺跡の現地踏査を通じて、紀元前15世紀以前のミノア期の「都市遺跡」は、次期以降の都市遺跡と比較して、小規模であり、「公共施設」があまり独立分化していないといった大きな違いが見られる。王宮とその家政機関が拡大したものと解釈する方が妥当であるように思われ、段階的には、日本の飛鳥期の宮殿と対比できるのではないかとの印象を受けた。

ミケーネ期以降のポリス都市遺跡は城塞都市として形成され、神殿・アゴラ・住居の分化が見られる。王宮の占める位置は小さくなるか、あるいは無くなる。こうした変化は、古代デモクラシーの政治体制をよく反映している。しかし、一方では、神殿を主体とした都市構成をとっていること、急峻な山上や生産基盤や交通の便の悪い内陸に位置する例があることなどを考慮すると、これらの都市の成立は、商工業といった非農村的経済活動や政治の拠点ということをも第一の要因としていたとは必ずしも言えず、むしろ、聖地にたいする宗教上の拠点・防衛基地としての側面が重視されていたことを推測できる。また、城壁をとまなう都市形態は、内在的要因以上に、対外的な契機が、早熟的かつ高質の内容を持つ都市形成をもたらした大きな要因であったことを示唆している。こうした都市形成の過程は、日本の都城の成立過程と大きく異なるが、前期難波宮などの造営の要因を考える上で重要なヒントを与えるものと思われる。

帝政ローマ期の段階では、行政機関の施設が多く認められるようになるが、それらは日本の宮城のような一郭を形成してはいない。それは、日本の都城が当初から王宮を中心に計画的に建設されたのに対して、ローマがいわば集積型の都市であったことによるものであろう。

行程中、アグリジェントやアムンツィアータの遺跡では、結婚式の記念写真をとる光景にであった。永年保存されてきた遺跡で永遠の愛を誓う若い男女の姿に、人々の遺跡に対する想いを垣間見て、日本での遺跡に対する関心は如何かと思わずにはいられなかった。（山中敏史）

在外研修報告

—中南米の古代遺跡—

1990年1月15日から二ヵ月間、文部省在外研究員としてメキシコ・ペルー・ブラジルに出張した。訪問の目的は、アステカ・マヤ・インカ等の古代文明が残した都市・神殿・宮殿遺跡およびその関連遺跡を実見調査し、それらと日本の都城遺跡を比較研究することにあった。

現在のメキシコシティーとはほぼ重複する位置に栄えたアステカ文明テノチティラン遺跡(13～16世紀)は、人口20～30万とも推定される大都市遺跡で、その中心には城壁で囲まれた方形の神殿域が存在する。城壁の各面には一つの門が開き、神殿域内にはほぼ対称形に建物群が配されていたようだが、その核となるべき中央神殿は東を正面とする。また、7世紀ごろに栄えたテオティワカン遺跡も方格の地割を伴う大遺跡で、太陽及び月のピラミッドや、ケツアコアトルの神殿などが規則正しく配置されている。ただし、このテオティワカン遺跡でも、道路が示す地割線は、方位とは必ずしも一致していない。

ユカタン半島およびその周辺地域に栄えたマヤ文明は紀元前からの前史を持つが、その最盛期は7～8世紀であり、日本の古代律令国家の成立・発展期に相当する。パレンケ・ティカル・コパン等の遺跡がそれで、9世紀以降は海岸に近いウシュマル・チチェンイツアー遺跡へと中心が移っていく。これらのマヤ遺跡群では、宮殿域を区画する施設は未発達で、神殿や宮殿、球技場などを点々と配置し全体を構成する。この場合、2～4棟程度の建物がコ字・ロ字形に配置されたものが構成の最小単位であり、これを幾つも連ね配置することによって全体の町割が作られていくようだ。

アンデス高地に栄えたインカ帝国では、精緻な石積技法を用いて築いた建物群を連ねて都市空間を構成していく。宮殿や神殿建物を周到な都市計画のもとに配置するが、ここでも方位との関連は指摘できない。もっともインカ帝国の全盛期(15・16世紀)は短く、その前史たるブレインカ遺跡にも見るべきものは多い。ナスカ、イカ・チンチャ、チャンカイ、モチェ、チムーなどの海岸文化がそれだが、これらの海岸文化は都市遺跡を形成しておらず、墓地遺跡が顕著である。ただし、北部海岸地域に栄えたチムー文化(10～14世紀)は、チャンチャンという大きな都市遺跡を残している。この遺跡では幾重にも巡らされた壁と通路が特徴的で、その範囲は方約4kmにもおよぶ。ただし、この通路は縦横に走るものではなく、鈎の手に曲がりくねった迷路が相互に連なっているにすぎない。その意味では「城塞の町」である。

ブラジル・アマゾン域も古くから人の住むところである。一説によるとインカ・マチュピチュ遺跡は、アマゾンからの進入に備える砦であると言われるように、インカ帝国の東辺に脅威を与えたようだ。ただし、顕著な遺跡は残しておらず、まして都市の形成はない。

以上のように、中南米に残る古代都市遺跡には、日本の古代都城に一脈通じる特徴点も多々みられた。今回の訪問で得た成果をもとに、今後さらに検討を重ねたい。(黒崎 直)

在外研修報告

—アフリカ・ヨーロッパに石器技術をたずねて—

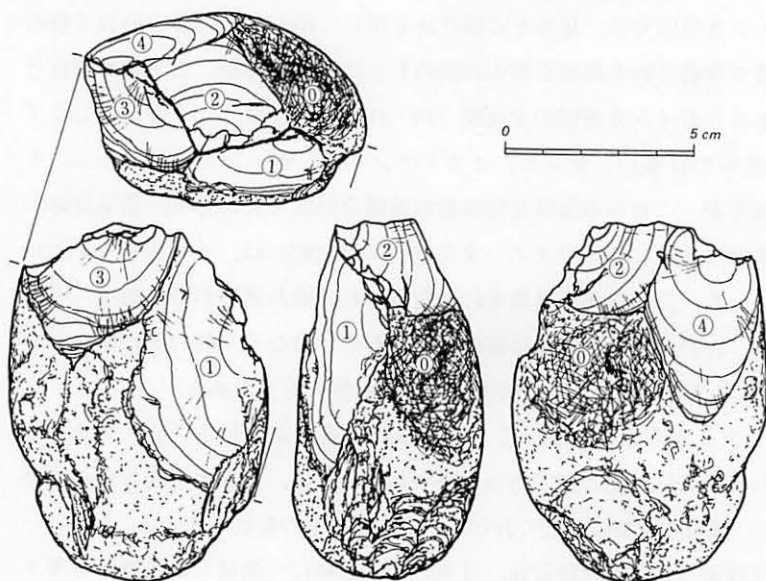
3月28日出国、6月27日帰国。石器づくりの技術を通じてみたアフリカ、ヨーロッパと日本の旧石器文化の比較研究をテーマに、三ヵ月間、イギリス、スウェーデン、デンマーク、フランス、エジプト、ケニアの六ヵ国を旅し、石器づくりの技術的な検討と実験研究者を尋ねた。

旅には思いがけない出合がある。「場所」はエジプト、ギザの砂漠の中。「物」は礫を素材にした石器。3基の巨大ピラミッド、クフ王らの壮絶な夢の跡の尖峰を仰ぎみながら、南西隣の丘陵に石器用石材フリントの採集に入る。一面に、中小様々な円礫が果てしなく続く。目標は、先王朝時代フリント製ナイフ用の素材。現場に立ち、その夢ははかなくも消えた。外観だけでは良否の判断がつかず、試し打ちしながら選別、2時間近く熱砂礫の中で探しまわる。集めた礫の中に、割り取った状況の歴然とした「礫器」が混じり込んでいるではないか。

使用素材は握り拳大よりやや大きめの礫。割取った面は全部で4面（挿図①—④）。時間差の判読から、作られた順序は面①>②>③>④である。①③は正面側、②④は裏正面側にある。①は②の、②は③の、③は④のそれぞれ打面となり、三回連続した絶対的な交互剝離関係を示す。作り出した機能縁線が大きくジグザグをなす、まさに教科書的なチョッピングツール。そして、見落せない点は、面①の設定位置の選定にある。この資料は、みごとに選択理由を説明してくれている。礫の縁は概して丸い。割始めの手がかりを得るのは容易ではない。丸い縁に対する第一撃は、下手をすると、あらかた叩き飛ばしてしまうことになり、小形の礫では、残り部分の重量を確保できない。その点、礫側面を作る自然の凹み（搜図⑩）を巧みに利用し

た配慮を読み取れる。

たった4回の打撃で自然礫に道具の形、機能を与える巧みに、舌を巻かざるを得ない。ケニアで、180—200万年の古さを持つといわれるコビフォラ遺跡の同様な礫器をみた。7面ほどが複雑に組み合って、道具の形を作る。彼らの割の体験は実に良く整理されているといえる。（松沢亜生）



200万年？の間、出合を待ってくれた「礫器」